

には入らないものです。父を失って初めて父母が歩んだ道の厳しさむなしさを、身も凍る思いで受け止めております。

平成二年、私は私の人生の分岐点となった「楡の木  
の広場」を訪ねました。しかし、やっと探し当てた楡  
の木は黒こげになって立っていません。木の根元には  
「祠が建って高い塀に囲まれています。かつての煉瓦の  
家は取り払われ整地された中、土饅頭が並んだ地点に  
立てば土は重油を撒いたように黒ずみ草も生えていま  
せん。すんでのことに私もここに眠る方たちの仲間入  
りをするところでした。

私は、日本から持ってきた日本酒や菓子を供えて手  
を合わせましたが、天を突く黒こげの楡の木に、ここ  
に眠る人々の無念の思いを見るようで涙が止まりませ  
んでした。

あの動乱の最中、父の元で働いていた現地の人たちが、何人も米や野菜を持って見舞ってくれました。学校ではロシア人、朝鮮人、中国人と肩を並べて学び、国籍など気にもしていませんでした。日本はなぜ銃で

解決しようとしたのだろうと慙愧の思いが胸を圧します。人間が銃を手にしたとき、GPUにみる非業な鬼の姿になります。だれでもなりうることをこの目で見ました。そしてどのような正義に彩られたとしても、陰に泣く人々がでることをも見続けてきたように思います。

父母と共に過ごした満州での十三年は懐かしくも苦しい十三年でした。

## 命ある限り生きる

栃木県 齊藤 トミ

### 私の生いたち

私は昭和十年四月、「大陸の花嫁」などと新聞紙上でもてはやされて、五月には第一次移民団の花嫁として渡満いたしました。

大正三年七月十一日、栃木県河内郡篠井村という農村に生まれ、後に町村合併により今市市となりまし

た。電灯もなく、もちろん自動車もなく今市の町まで十二キロメートル歩き、宇都宮に行くには八キロメートルほど歩かなければ自動車に乗れないほどの片田舎でした。そんな田舎の学校で学び高等科になったとき、師範学校を出ると学校の先生になれるんだという先生の勧めで、その気になり試験を受けることになりました。

当時農村は不景気のどん底で、学校の先生も人数を少なくするような仕末で、師範学校も男子は八十人入学できましたが、女子は半分の四十人に減らされて、口頭試問だとか身体検査だとかで厳しいときでした。見事失敗しましたが、先生が「どうせ始めたのだから浪人して来年も」との話しに、またその気になり次の年の人たちと勉強することになりました。もともと背の小さい私は一年過ぎてもたいして大きくならず、またも不合格となってしまいました。

どうしても百姓になりたくないと思つた私は、ある新聞の看護婦学校の生徒募集の記事を見て上京する決心をし、両親に話しましたところ叔父と姉が上京して

いましたので許しが出て上京し、入学試験に合格いたしました。田舎者の私はなんにも知らなかったのですが、その学校は見習い看護婦が国家試験を受けるために勉強をする学校でした。病人など全然見たこともない私でしたが、国家試験に合格いたしました。しかし私は十七歳でしたので正看護婦の免許証がもらえず、次の年まで見習い看護婦をして、十八歳になってから一人前の正看護婦となりました。そして四年半ほどたった昭和九年十二月、しばらくぶりに帰郷しました。

#### 渡満の理由

家に帰ってみると、隣部落の人で満州に移民として行った人が花嫁探しに帰国するので、それまでに花嫁を見つけておきたいと、あっちこっちと探しているとの話でした。

そのころ主人の兄は一年志願の少尉で、河内郡の在郷軍人分会の会長を務めていたので、第一次移民の募集のときには先頭に立って呼びかけた立場の人でした。主人は三男坊で近衛兵を除隊したばかりでしたので、第一番に選ばれて渡満しました。そのようなことで、

今度はお嫁さんを迎えにくるので、その時まで四方八方手をつくして候補者を見つけたいとのことでした。

私のいとこが義兄とは友達で同じ少尉でしたので、早速私のところにきました。でも両親は満州と聞いて、年回りが悪いだの、方角が悪いだのと反対でした。結局本人の意思ということになり、私の気持ち次第となりました。

私は満州と聞いてはじめは少し不安でしたが、国策だとか広い土地をもらい好きなように生活ができるのだとか、良いことばかりでしたし、家柄も申し分なく、小学校も同じ、四つ年上でしたのでうっすらと覚えていたような気がしました。両親もしぶしぶ許可してくれ、早速三月八日に結納、二十八日には結婚式ということになりました。主人も結納の日に帰ってきましたので、忙しく手続きをし五月四日には東京に各県の皆さんと集合し、栃木からはほかに二人頼まれてきたので一緒に行くことになり、敦賀から清津に上陸しました。

初めての船旅で、少し船酔いもしましたが無事上陸

しました。清津からハルビンへと大草原を突っ走り、今度は佳木斯ジャムスへと船の旅、ちょっと濁ったような河の水、どうしてもきれいとは言えない船でしたが、三日目には佳木斯の街に到着しました。そこで満人の馬車を頼み、少しばかりの荷物を乗せて出発。一泊を満人部落でお世話になりオンドルなどを初めて見せていただき、二日目に弥栄村（永豊鎮）に着きました。

栃木屯は佳木斯からくると最初の部落ですので、町へは行かず直接部落の皆さんの歓迎を受けて落ち着きました。でも宿舎は泥壁の長屋が二棟で、一部屋ごとに仕切られた単身者用のアパートでした。夢に見た新婚生活もこの有様でした。でも後から二回目三回目と花嫁さんが到着するので、宿舎が心配になり家屋が建築されました。

その次の年には、自分たちの分け前の土地へ（幅百メートル・長さ千メートル）と分かれることになりましたが、まだ匪賊の心配もありましたので、一棟の真ん中が壁で仕切られ二世帯で生活することになりました。部屋もオンドルの部屋と日本間とを作り、炊事場、

風呂場もできてようやく家庭らしくなりました。

主人は現地訓練所に勤務していましたが、毎日四キロメートルあまりを歩いて通っていました。百姓の方は、満人の家族を家の側に住まわせておりましたので、馬車と農機具を買ってやり、秋の収穫はイーパンイーパン（半分半分）という約束で、自分たちは野菜だけを作りました。種さえまけば、草を取るだけ、全然肥料はいりません。馬鈴薯でも、まくわ瓜やかぼちゃでも、ごろごろするほど大きくなりました。

春には野原にさまざまな花が咲き乱れ、子供も生まれ二人となり、佳木斯からの鉄道も通り、自宅から百メートルぐらいのところを汽車が通るようになりました。夢に見ていた大陸での生活を、満喫することができました。

そんなとき、青少年義勇隊がくるので、現地訓練所を建設するための出張命令が出て、主人は嫩江に行くことになりました。嫩江は齊齊哈爾より北方で、ソ連の国境近くとのことで、主人は一カ月に一度か二度帰宅するのみで、私は子供二人を抱いて留守居をするこ

とになりました。二人の子供は年子でしたので、小孩（満人の子供）を子守に頼み、二年半ぐらいを無事過ごすことができました。隣の人たちや満人の家族がよくしてくださいましたので、感謝の気持ちで暮らしました。

三人目の子供が生まれたので、主人は出張を辞退して帰宅いたしました。そして今度は協同組合の方に勤務しました。乳牛を飼育して牛乳を搾り、それを背負って永豊鎮の処理場まで運びました。豚を飼ったり鶏を増やしたりして小孩に放牧させ、いよいよ軌道に乗ってきました。

家庭も平和な暮らしになり、子供も四人五人とにぎやかにになりました。長女が一年生に入学しましたが、本校しかないため寄宿生活することになり、月曜日の朝送って行き土曜日の午後迎えに行くという一年間でした。二年生になると茨城屯に分校ができ、一人で通学することができました。しかしこのころから戦局はますますきびしくなり、主人の弟が召集され、戦地に向かう途中船が撃沈され戦死との報を受けました。

翌年の十九年に初盆に線香を上げるため内地に帰国したとき、二女雅子が風邪をこじらせてお医者さん通いをしていましたので、内地なら気候も良いからと、私の実家に頼んできました。そして一年後に敗戦とは、夢にも思いませんでした。

昭和二十年七月、主人に召集令状がきました。そして次々と、四十五歳までの男の人たちはみんな召集されました。栃木屯では残された男性はたった一人だけでした。八月六日だったと思いますが、無蓋車に子供と婦人たちが大勢乗って行くのが見られ、佳木斯の方からどこへ行くのかなあと見送りました。後で聞いた話では、満鉄の人や軍属の家族が一足先に避難したのだそうです。

八月十一日の九時ごろ、前の家からの言い継ぎで、南方へ疎開するから明朝五時までに弥栄駅まで集合するようにとのこと。身の回りの品と食糧とを一週間分持って集まるようにとのことでした。

#### 引揚げ時の苦勞

四人の子供（九歳、七歳、五歳、三歳）を抱え、し

かも夜でどうしたらよいか途方にくれて、何からすればいいのかぼう然としてしまいました。とにかく子供たちの着替え、それに食糧、それには飯盒も必要だ……そして手元にあったわずかなお金と、いつか役に立つからと思い貯金通帳を持ちました。財産の整理など気がつきませんでした。

全部を満人に任せ、馬車で駅まで送られました。村全部の人が集合しても、汽車はきませんでした。ようやく夕方に汽車がきて乗り込みました。無蓋車でようやく座るだけ。そして佳木斯の街へ着いたとき、空一面が真っ赤に燃え上がり、空を焦がすかのように見えました。もう駄目だどがっかりしましたが、今度は子供たちをどうすればよいのかと考えました。次の街も、その次の街も火を放って逃げたのだと思います。そのうちに雨が降り出してみんな頭からずぶ濡れです。子供は泣き出し、大人までおかしくなり叫び声を上げる有様です。生き地獄とはこんなものかと思いました。そして綏化の駅で降ろされてしまいました。どうしてかなあと思いながら、しばらく行列に連れられて歩い

て着いたのが、飛行場の格納庫でした。「日本が戦争に負けた、無条件降伏」と聞かされ、どうなることかと目の前が真っ暗になり、生きた心地もしませんでした。

コンクリートの上に、アンペラの切れはしを見つけてきて敷き、その上にごろ寝をし、たいした食物もなく、その上ソ連の兵隊から武装解除と言われ、みんな土下座させられて小刀まで取り上げられてしまいました。そのとき私の側にいた、立派な口髭を生やした弥栄警察署の署長さんがポロポロと涙を流したのが、今でも臉に焼きついています。どんなにか残念で残念で、悔し涙だったことでしょう。

アンペラ生活をしているうちに、子供たちは栄養失調と生活の変化で、風邪をひいたりお腹をこわしたり、子供たち以外でも病人が出始めました。「はしか」が流行してきたのです。私の子供たちも上の子二人はすでに終わっていましたが、下の二人はたちまちうつってしまいました。五歳と三歳の子、食べ物もろくになく、着物もないのに「はしか」とはなんとということか

と残念に思いました。栃木県出身の保健婦の宇賀神さんが、親の血液を子供に入れてやれば軽くてすむと教えてくれました。早速私の血を採り子供たちに注射器で入れてやったのですが、もう流行してしまっただけは遅れかなあと言っていました。それでもできるだけのことはと、親の思いは病気の子供に対して精いっぱいでした。

そのうち九月に入り、北滿の朝夕はめっきり寒くなり、このまま凍え死にをするのかと不安でした。でも工藤村長さんはじめ先立つた方々の苦労やお骨折りにより、汽車を出して大連に向かうことになったとの話でした。

いよいよ九月十四日、汽車に乗れるとのことで、はしかの子供二人を連れ上の子二人と五人で乗り込んだのが貨物列車でした。煉瓦が半分ぐらい残っていて、それをみんなで平らに並べてその上に着物を乗せ、病人を寝かせるわけです。友達が「賽の河原とはこんなものか」などと言いましたが、全くだと思いません。

駅に止まるたびにソ連兵がきて、時計・万年筆・皮

製品など、手当たり次第持って行くので、駅近くになると、中からみんなで押さえて入れないようにしていました。ソ連兵の来ない駅に行くと、男の人たちが「マントウ」を買ってきてくれたり、水をバケツに汲んできてくれたりしたので、それをみんなに分けてもらい、命をつないできました。「女は連れて行かれてしまうから、顔を出すな」と言われ、なんにもできませんでした。

汽車もなかなか走らず、奉天の駅には三日も停車していました。その間に三歳の子が亡くなりました。力尽きて短い人生を終わったのです。ただ欲しがる水も十分飲ませられなかったのが心残りです。髪の毛と爪を切り取って内地へ持ってきて、斉藤家の墓に葬られました。遺体は駅の側にある防空壕に入れられました。この防空壕には、四十人近い子供が入ったと言われました。

汽車はなかなか走らず、大連まで十日間もかかり、その間に亡くなった子は、川が見えたからと汽車の窓から投げ込んだり、名も知らない小さい駅の線路の側

に、ちょっとした時間のうちに置いてきたり、犬や猫の子のように取り扱われたのです。とても平時では考えられない状況でした。

ようやくして大連に到着したので、私の脇に寝ていた病気の子をお母さんの背中におんぶさせてやろうとしたとき、頭をガクンと下げたと思ったら、息を引き取ってしまいました。その子をおんぶしたまま、商業学校まで歩いたのでした。私も五歳の子が病気はなんとか良い方に向かったのですが、歩けなくなってしまいましたので、リュックサックを背負った上に肩車をして、両手に飯盒と弁当箱をこれだけは手放せないとしっかり持ち、九歳と七歳の子と商業学校まで約四キロメートルの道を、避難民の行列と共に、本当に気力だけで歩いたような気がしました。

学校に着いたら張り詰めていた心が緩み、がっくりとしてしまいました。でもこの先どうなるのか、どうしたら良いのか不安が先で落ち着きません。十日間も腹一杯の食べ物も入ってないところへ、赤飯のように見えた高粱の御飯はおいしそうでしたが、一口食べた

ら舌の上でゴソゴソ、それでもお腹が空っぽでしたので、なんとか飲み込みました。病気がりの子はどうしてもものを通らないのでしよう、「いらぬ」と食べません。それで粟と米を少しずつ入れてお粥を作り、これでようやく食べてくれました。

### 避難民生活

これから自分で生活をしなければなりません。手元の金も残り少なくなり、毎日仕事を見つけて働かないと食べられません。どんな仕事でも話があれば出かけました。中国人の洗濯婆さんでも致し方ありません。食べるためには、負けたのだからと心に決めて働きました。

そんなとき、満州国の郵政局の通帳一冊につき、三百円を払い下げてくれるとの報に一息つきました。大事に背負ってきた甲斐があったと、これが地獄に仏と思ひ感謝しました。病人にも栄養のあるものを食べさせられます。はしかで生き残りの子は、本当に数えるほどでした。

それから毎日仕事に出かけました。歩けない病人

を九歳の長女に任せ、食事にトイレと頼みながらです。一日働いては帰りに次の日の食糧を市場に寄って買い求めて、一日も休むことなく働かなければなりません。

一つの教室に一人は当番で残り、子供たちの見張りや本部との連絡などがあるので、代わる代わる休むよう定めていました。本当に弥栄村一丸となって、村長さんが先頭に立って引率し、大連までたどりつけたことを心から感謝申し上げます。病気の子供を汽車に乗せられなかったら、私たちはどうなっていたことでしょう。今思い出しても、ゾッと身震いするような気持ちです。

なんとか日雇いをしながら、生活も落ち着いてきたとき、主人が商業学校へ訪ねてきてくれました。仲間四人と、弥栄村が大連に行ったとのうわさを聞き、たどり着いたのだそうです。まるで満人そっくり。髭をボウボウ生やして支那服を着て、腰には一斗缶を切つて針金でつるをつけた鍋代わりのもの、缶詰の空缶も針金でつるをつけて二つ三つ、いつ、どこでも煮炊きして食べられるように下げておりました。あっちこっ

ち逃げ回っているときには、貨物列車に乗せてもらったりして、大連までたどり着いたとのことでした。

早く生きて帰ってきてと心に念じていた主人が、目の前に現れたときは夢かと目を疑うほどでした。とにかく良かった、生きて帰ってきてくれた。涙の対面でした。安心したとき、体調が少しおかしいと言い出して、お医者さんに診察していただいたところ、発疹チフスだから大連病院に入院とのことでした。今度は病人と子供、どうにも仕方がありません。でも軽い発疹チフスでしたので、十日間ぐらいで退院できました。

ホッとしたのもつかの間、今度は私が感染してしまいました。このとき私だけでなく、学校内のあちらこちらで発疹チフスが増えてきて、学校の地下室に隔離されました。次から次へと苦労は絶えませんが、病状はみんな軽くてすみました。私もは、皆良くなりましたが、栃木県出身の和田さんの奥さんは、発疹チフスではなかったのですが、疲労と栄養失調で二人の男の子を残して亡くなりました。南山へ運んで葬ったそうです。残された子供は、みんなで世話をして食べさせ

せて、内地まで一緒に連れてきました。

しかし、体の弱い人やお年寄りなど、大した食べ物もなく、床の上で布団もろくにない中であっては辛い日々で、栃木の星さんのご両親も大連の学校で亡くなられ、南山の土になってしまいました。

大連に住んでいた日本人の方々から、古着や座布団などの差し入れがありましたので、座布団をほどいて大きいのに作り替え、下敷とかけ用と二枚を作り、子供三人と私たち夫婦五人がごろ寝して一冬を過ごしたのです。よく病気もせず、越冬できたと思いました。そして、今度は二人で働いたので生活は楽になり、一年間過ごすことができました。

昭和二十一年十一月に入り、引揚げの話が出ました。波止場を集結するようにとのことでした。私が血洗いをしていった日本人のお店の奥さんに、私たちがお風呂に入っていない話をする、「お風呂を一日貸してあげるから、栃木の人みんなで沸かして使用するように」と言ってくださり、みんなで交代に、一年五カ月ぶりに風呂に入ったのです。本当に有り難いことでした。

大連の垢を落として船に乗れました。

船に乗る前に、当地の紙幣では内地に持って行くことも通用しないので、日本の紙幣と交換してもらおうことになりましたが、一万円で半分の五千円です。一人千円までは内地に持って行けるといふことなので、私どもは五人ですから、一万円を持って行かなければ駄目です。ようやく取り替えてもらいました。本当に戦争に負けるとは惨めなことだと、つくづく思わさせられました。

船に乗り込み、麦ばかりの御飯が出されましたが、とてもおいしく今でも忘れられません。

いよいよ佐世保上陸。すぐに汽車で郷里へ帰れるものかと思っていましたが、検疫のために一週間留めて置かれました。そして十七日、宇都宮に着きました。乗物の都合で旅館に一泊して、次の日、懐かしい我が故郷へ帰ってきました。

主人は一緒に連れてきた秋田さんの二人の子を、先方と連絡を取り県庁にて引き渡し、夕方に帰宅いたしました。秋田さんの御主人もその後帰らなかったとか、

消息は分かりません。

#### 帰国後の生活

心身ともに疲れ果てましたが、主人の実家にひとまずお世話になることになりました。

そのころ、主人の父は病床に就いており、私たちが帰ったので安心されたのか、十五日ぐらい過ぎて亡くなりました。主人もたとえ十五日でも看護ができましたから、心の重荷も少しは軽くなったのではと思います。

また開拓に行くか、どうするか、義兄と主人で話し合いをしました。五人もの大勢でいつまでも実家にお世話になっていることもできません。隠居用の家が一軒ありましたので、そこへ移り住むことになりました。主人も義兄と話し合った結果、経験があるからと地区の農協に入れていただき、勤めることになりました。実家に預けておいた子供と、引揚げ後に生まれた子供、合わせて五人も子供を抱え、とても安月給では食べさせられないからと、田んぼ五反歩と原野・山林合わせて二町歩ほどを分けてもらい、部落内に落ち着

くことに決定しました。主人は勤めなので、私は百姓の仕事など何もできないのに、毎日本家に嫌いだと言った百姓の見習いに行つて、できないながら一生懸命やりました。農具も馬もないのだから、私どもの田んぼの植付けから刈取りまで、全部お世話になる始末です。そのうち原野を開墾し田んぼも一町歩ほどになり、お米も供出するほどになりました。

そのころ、義兄の追放も解かれ市会議員に当選しましたので、主人も市役所の教育委員会の社会教育の方へ移りました。社会教育は老人会、婦人会、青年団などの指導が主で、戦後の混乱した社会に旋風を吹き込んだことと思います。定年退職をしたとき、「地元工場誘地をするので、その手伝いを」と言われ、今度会社の仕事で一生懸命でした。人員の募集も終わり、仕事も軌道に乗った頃のある朝、出勤の途中でした。高校を卒業したばかりの若者に追突され、頭蓋骨骨折で亡くなりました。工場に出勤の途中でしたので、産業殉職者として、労働省で建立されている高尾の「みころも堂」に合祀されました。本当に骨折り通しの一

生でした。

今は子供たちもそれぞれ家庭を持ち、どうにか生活もできるようになりました。

私も全部長男に任せて、今度は私の人生とばかりに自由な生活をしています。地区の婦人会長を十年務めて、その間婦人会・農協婦人部などでいろいろな教室が開催されましたので、そこへ奮って参加し、お習字・民謡・民舞・手編み教室・フラワー教室・七宝焼き・皮工芸・日光彫りなど、今までできなかったことに何でも頭を突っ込んでみました。そしてゲートボール。これは三級審判員の資格をとり、審判したり監督したり、今市市の大会で二、三度優勝して、県大会にも出場したこともあります。

七十二歳になったとき、県に老人大学があることを聞きそれに入學し、二年間通って卒業証書をいただきました。

今は毎日、午前中に行っているゲートボールの練習を楽しみに、仲間と遊んでいます。ただ一つだけ、自動車の運転免許を取りたかったのですが、主人が自動

車事故で亡くなったので長男に反対され、これだけは駄目でした。それでも今市に六十歳以上の人の団体で、今市OB山岳会という会がありましたので、私も六十歳から八十歳まであちらこちらと山歩きをして、心残りはありません。

終わりに今の心境を一言。

人の世の山坂道をふみ越えて

はや八十路の坂を二つ三つ越ゆ

しみじみとしわの数増すこの顔に

過ぎ越し昔の道のりを思う

紅白の球をタッチだスパークだ

老の頭を少しひねりつ

## 有為転変の人生

東京都 白井喜次

私は、一九二五（大正十四）年旧関東州の大連で生まれましたが、物心がつくころには父の職業の都合で仙台郊外の野戦重砲兵部隊の官舎に移り住み、そこから小学校に通学していました。小学校三年生の春、父は再び大陸に転勤になりましたが、そのときは母も私も妹もなぜか父と一緒にいかず、仙台の官舎に残っていました。

父は大陸に転勤してから約二年後の一九三七（昭和十二）年の暮れ、私が小学校五年生のときに戦病死してしまいました。

私たち親子は、やむを得ず土浦の近郊の農村に転居することになってしまいました。そこでは、祖父が小学校の校長を定年退職して村役場の助役をやっており、私たちは祖父の家の離家で生活することになりました。